

## 大牧広の滑稽俳句（一）

小西昭夫

「港」主宰だった大牧広氏（以下敬称略）は二〇一九年の四月に亡くなられた。現代俳句協会賞、詩歌文学館賞、山本健吉賞、蛇笏賞等を総なめにした俳人であった。その大牧広の既刊十冊の句集に未刊の作品を加えた『大牧広全句集』が刊行された。その全句集の帯文が実に的確に大牧広を語っていると思われるので紹介しよう。

「能村登四郎を師とし人間の肌触りを大切にする抒情性から出発した大牧広は、したたかな批評精神をもって戦後日本をみすえた昭和一桁生まれの俳人である。その俳諧魂は屈折した哀愁をただよわせ、悲しみの眼差しをやどす。一介の庶民であることの誇りを失わず、時にその怒りを作品にぶつけつつ都市生活者として生き抜いた一俳人の全句集である」というものである。

大牧広は最後まで社会性俳句にこだわった硬骨の俳人だが、ぼくが大牧広に感じて来たのは、社会性俳句へのこだわりというより「一介の庶民であることの誇りを失わず、時にその怒りを作品にぶつけつつ都市生活者として生き抜いた」ことへの共感であった。そして、そこから生まれる大牧広のもつ滑稽やユーモアへの関心であった。

前置きが長くなったが、今回から三回にわたって大牧広の滑稽俳句を紹介したい。

### 母が来て母の荷が来ず冬休

あるある感満載である。「冬休」といわれると学生を想像するのだが、社会人の年末年始の休暇かもしれない。結婚されてお子様もいらっしやって、お母様はお孫さんへのお土産なども荷物に入れていたのかもしれない。年末年始の運送事情でお母様は来たが荷物は来ないのである。普通は自分より先に荷物が着くように送るだろうから、何かの手違いでお母様の方が先に着いてしまったのだ。

この句には順番が逆になってしまった可笑しさがある。

#### 運動会白勝ちすぎて雨兆す

ナンセンスな句である。運動会に限らず大味なゲームは興ざめである。赤を応援していれば尚更である。白が勝ちすぎたことと雨が兆すことには何の関係もないが、雨が兆したのは白が勝ちすぎたからだと断定している。その強引さが笑えるのである。

#### まっとうに生きてこたびも毛虫焼く

多くの庶民はまっとうに生きている。まっとうに生きると金銭や地位、名誉といったものからは遠いという印象もある。まっとうに生きるとは正しく生きるということだが、毎年毛虫を焼くのだ。つまりは殺生である。毛虫は害虫だが生命であることには変わりがない。まっとうに生きるとはいつでも自分たちに都合の悪いものは排除するということである。そこにまっとうに生きるペーソスが感じられる。

#### 蟻出でて花街なるをよろこべり

「蟻出でて」で軽く切れて「花街なるをよろこ」んでいるのは作者とも読めるのだが、「蟻」が「花街をよろこ」んでいると読んだ方が数段面白い。この蟻を擬人化した「ありえへん」感覚は面白い。背後には大きな声では言えないが「花街なるをよろこ」んでいる作者がいるのかもしれない。